

主体的かつ自律的学修者の育成とエビデンスベースの学修成果の可視化

私立大学等改革総合支援事業タイプ1（選定：平成25～29年度）



共愛学園前橋国際大学

取組のポイントや補助効果

- ◆アクティブ・ラーニングによる達成感のある授業とカリキュラムの充実
- ◆学生による自己評価を基盤としたエビデンスベースの学修成果の可視化

群馬県前橋市にある共愛学園前橋国際大学は、両毛線駒形駅で下車して徒歩約10分のところにあり、約1,100の在籍学生数である。大学の周囲は緑が多く、桃ノ木川が流れ、赤城山を望むことができる。学生が学びに集中できる環境だが、学生募集という面では特別に恵まれているわけではない。

このような状況の中で「地域と一体となって大学を伸ばしていく」、「地元企業に必要な人材を輩出する」という考えから、Global+Local=Glocal（グローバル）をコンセプトに改革を進め、私立大学等改革総合支援事業や文部科学省の推進する各種事業に採択されている。また全国のさまざまな高等教育機関からの視察や各種セミナー等に講師として招聘されるなど、高等教育の一つの取り組み姿として注目を浴びている。

取組の目標・目的

建学の精神は「共愛＝共生の理念」である。大学を巣立つ一人ひとりが人々と共に、そして社会と共に、自律的かつ協働的に生きることができるための素養を身に付けることが望まれている。

教育目標は「国際社会のあり方について見識と洞察力を持ち国際化に伴う地域社会の諸

課題に対処することのできる人材の育成」、「グローバル・リーダーの育成」を掲げている。学生には、キャンパスにおける主体的・能動的、協働的学修のみならず、海外、地域における実践的な学びも重要であり、その質を高め学修成果を可視化することを求めている。

これらの理念と目標は、「KYOAI GLOBAL PROJECT」の指針でもあり、タイプ1に関連して、「共愛12の力」としてまとめた学修成果指標に反映されている。

取組に至る背景や問題意識

大学では「進化・深化プロジェクト～学びの共愛へ～」と題するビジョンを掲げ、学内の意識の向上を図ってきた。2012年度にアクティブ・ラーニングのための校舎「KYOAI COMMONS」を建設したのもその一つの表れである。

「学生中心主義」をモットーとし「ちょっと大変だけど実力がつく大学です」をキャッチフレーズに開学以来歩みを進めてきた。その結果、多くの授業でアクティブ・ラーニングが導入され、さまざまな海外や地域に置けるプログラムも創生してきている。

しかし、それらは各担当者の努力によるものであり、大学としてマネジメントの基盤と

なる学修成果の可視化も行われていない中、十分なカリキュラム・マネジメントのもとに実施されたとは言い切れない部分があった。

この課題を克服して取り組み自体を学生生成のプロセスとすることを意識し、各種取り組みを展開している。

取組内容

(1)～(5)は本事業を実施するに当たって、土台となる基盤的な取り組みである。

- (1) アクティブ・ラーニング（以下AL）の全学展開
- (2) シラバスの記載内容の充実
- (3) ナンバリングの実施
- (4) 厳格な成績評価の実施
- (5) 学修行動調査の実施

(6)～(9)は大学独自で開発するなど、大学としての特徴的な取り組みである。

- (6) 学修成果指標「共愛12の力」の策定
- (7) エビデンスベースの学修成果可視化と

キャリアへの接続（ポートフォリオシステムと成果指標自己評価システムと成果の公開（ショーケース）システムを統合した「KYOAI CAREER GATE」の独自構築・運用）

- (8) ピア学修支援の展開（学部生同士によるライティングデスクの運用等）
- (9) 高大接続事業（高校教育改革はまさに大学教育改革の延長にあり、地域の教育力向上に寄与する）

学修成果指標は、商工会議所や地元企業の協力を得て「こんな力が身に付くように学生を育成したらどうか」という視点で策定している。原案は学内の担当部署だけではなく、研修として全教職員が参加するスタッフ会議で、全学的に話し合っまとめあげている。

「共愛12の力」を伸ばさせるのは、教員による授業科目だけではなく、職員の目標管理にも取り入れ、大学全体が「共愛12の力」に向かっている。こういった指標の策定や実施でのプロセスが重要である。

教育の質的転換 取組

取組の例

- 1 AL授業の全学展開
- シラバスの充実
- ナンバリングの実施
- 厳格な成績評価の実施
- 学修行動調査の実施
- 2 学修成果指標の策定
- 3 エビデンスベースの学修成果可視化とキャリアへの接続
- 4 ピア学修支援の展開
- 5 高大接続事業
- 入学試験の外部試験活用

特徴的な取組をPick Up

1 AL授業の全学展開

ALを含む科目 81.9%

ALを実践している専任教員 100%

アクティブラーニングのために設計されたKYOAI COMMONS

Ubiquitous Campus = 全校舎Wi-Fi化

3 エビデンスベースの学修成果可視化とキャリアへの接続

4年間の主体的な学修とその成果を目に見える形で積み上げ、キャリアにつなげる。

4年間の学修で身につける4つの軸と12の力(学修成果指標)

4年間のあらゆる学びと活動を、eポートフォリオであるKYOAI CAREER GATEに蓄積し、学修を振り返りながら、それをエビデンスとして、学修成果指標とコンモノーブリックに基づき成果の自己評価と可視化。さらに、活動や成果をSHOWCASEを通して社会へと発信し、キャリアへと接続。

2 学修成果指標「共愛12の力」

共通の力	共生のための知識	文化、社会、地域、人間、自然、外国語に関する知識
共通の力	共生のための態度	倫理観、マナー・マインド、学びの意欲
グローバル・マインド	国際社会と地域社会(国境)の関わりを捉える能力	
自己を理解する力	自分の強み、強みや弱み、成長を促す能力	
自己を制御する力	自ら課題を設定し、学びやその他の行動を推進させる力	
主体性	自ら課題を設定し、行動計画を立て、実行していく力	
伝達する力	聴き、書き、話し、演説し、伝える力	
協働する力	チームで物事に打ち向き合う力	
関係を構築する力	信頼と円滑な関係を築く力	
分析し、思考する力	情報を収集・分析し、問題を捉える力/論理的思考力	
構想し、実行する力	構想し、実行する力/目標設定力	
実践的なスキル	現代社会において必要とされるスキルと専門的なスキル	

4 ピア学修支援

- Library Peer Tutor (上級生によるレポート指導)
- English Peer Tutor
- IT Support
- 交流センター-Resident Assistant

5 高大接続

- 高大連携 コラボゼミ
- 県・県教委との連携により高校生が大学に違い大学生とゼミを展開
- 県内公立高校における授業担当
- 当該高校において課題研究の授業を本学教職員が担当し、単位も認定する取組
- 高大連携フォーラム(県教委主催)
- ポートフォリオを用いた高大接続
- 共愛学園高校の生徒にKCGアカウント付与

■AL(Active Learning)=一方的講義ではなく主体的・協働的で深い学び ■PBL(Problem Based Learning)=課題解決型学修 ■SL(Service Learning)=学修とサービスを繋いだ社会貢献型学修 ■FD(Faculty Development)=教員の教育向上のための諸取組 ■ナンバリング=科目に分野と難易度を付し課程体系を明示 ■IR(Institutional Research)=学内情報収集分析により意思決定や改善活動を支援、説明責任を果たす取組 ■ルーブリック=評価基準を観点と尺度からなる表で示したもの ■eポートフォリオ=学修の記録、振り返り、成果物等を電子的に蓄積する仕組み ■SHOWCASE=ポートフォリオの記録(Best Work等)を外部に公開する仕組み ■ピア学修支援=学生同士が学び合う取組 ■KCG=KYOAI CAREER GATEの略

図1 教育の質的転換取組

11

開始3年目の「共愛12の力」が学修成果の可視化として十分に機能しているかを、民間会社が開発したPROGテストやGPA等との整合性から相関関係を研究している段階である。

「共愛12の力」を身に付けるには、学生の主体的な学びと協調性や積極性が身に付く教育が必要であり、多くの授業をアクティブに行うスタンスである。「共愛12の力」とすべての授業科目はシラバスでひも付けし、「共愛12の力」が本当に身に付いているのか、教員の視点と授業アンケートによる学生の視点から検証する。

学生は授業科目だけではなく、キャンパスライフを通じてさまざまな体験をすることで成長すると考えている。そのため、例えば学生のボランティア活動についても、レポート提出を含めた教育プログラムとして単位化し、学生に学びが身に付く仕組みとしている。

このように、「共愛12の力」にあるグローバルな力という項目から考えると、ディプロマ・ポリシーに即していれば、すべて学生の学びである。

2013年度に私立大学等改革総合支援事業を受けて、大学全体のALの実施状況を確認したところ、教員個人が学生にとって良い授業を展開するために自助努力で行っていた。

それを学修成果指標の作成と合わせて、組織的に展開した結果、2016年度の実施率は82%まで達した。教員から「うちの大学はALをウリにしている」、「ALを学びたい」という声があり、翌年度に初めてALに関するFDを実施した。

各教員の努力が全学的な取り組みに発展し、大学の一つのブランドとなり、さらに教員からはALについて自己流ではなく、FDを通じて学びたいという要望が出てきた。こうした循環が生まれたのは、私立大学等改革総合支援事業を契機として、各教員が大学のマネジメントという視点を持てたことが挙げら

れ、大きな意義がある。

「KYOAI CAREER GATE」は「共愛12の力自己評価」、「学内外活動」、「学外活動」、「資格取得」、「読書履歴」、「授業振り返り」、「学年振り返り」を記録するセクションがあり、学生は学内外から活動記録や確認ができる。

評価に当たっては担当教員と面談を実施する。学生は自ら身に付いた力について、エビデンスの提示、言語化が必要となり、学生のさらなる学びにつながっている。蓄積したさまざまな学修活動と学修成果物の中から、特に自らの特長と成長を示す記録を「学びと成長のハイライト」として選択し、学外公表ページを生成し、学外者に対して自らの学びの記録を公開できる。このシステムは、就職活動時における「公開履歴書」としての利用を想定している。

このように、学修成果を自分の成長として客観的に意味付け、他者を納得させるだけの成長のエビデンスを蓄積することで、学生は学びの活動と結び付けて自分の強みだけではなく弱みを自分らしさとしてPRできるようになる。

実施体制

学長をリーダーとし、学長が主宰する学長室会議メンバー（理事長、学長、事務局長、副学長、学部長、学長補佐）がサポートしている。

学長室会議は毎週開催され、理事長と学長の意思疎通が図られている。

大学には学長室会議と全教職員出席のスタッフ会議があり、組織図上は学長室会議が上位だが、事実上はスタッフ会議が上位である。それは全教職員の意見を吸い上げる場がスタッフ会議のため、そこでの議論を重視している。また、学内ではさまざまな情報共有を行っている。学修成果の可視化もスタッフ

会議で共有し、全教職員が同じ方向性で物事を考える土台が形成されている。

取組後の変化

教育改革への取り組みは群馬県内の教育機関でも評価され、群馬県教育委員会と連携し、高校生が大学に通い大学生とゼミ形成の学びを展開する「高大連携コラボゼミ」を行っている。また教育委員、SGH・SSH運営指導員などの要職に大学の教職員が就任している。

高校のAL研修や進路指導主事、教務担当教員、校長会等での基調講演等の依頼も増加している。さらには、群馬県教委高校教育課から派遣された県立高校教諭が大学に一年間常駐する教員研修も実施している。

ALを活用する授業科目の組織的な展開に伴い、学生の授業外学修時間が増加した。実際に学生の成長も見られ、教育成果も徐々に可視化されている。

成功のポイントや苦労した点

全教職員がスタッフ会議で大学改革に参画し、情報共有を行い、全教職員が同じ方向に向かって改革を進めてきたことが成功のポイントである。

教員が自ら学生のために大学を良くしようとする思いからALを実践してきたこと、グローバルという目標に対して、地域の意見を重視するなど、地域と共に生きる大学として、さまざまな取り組みを行ってきた点も成功の要因と考えられる。

今後の課題・展望

ディプロマ・ポリシーの達成に向けてカリキュラム・ポリシーの見直しを行っており、カリキュラム改革に着手する予定である。

今後は、入試改革のみならず本来の意味での高大接続が重要であることから、より一層高大連携に取り組むことを考えている。

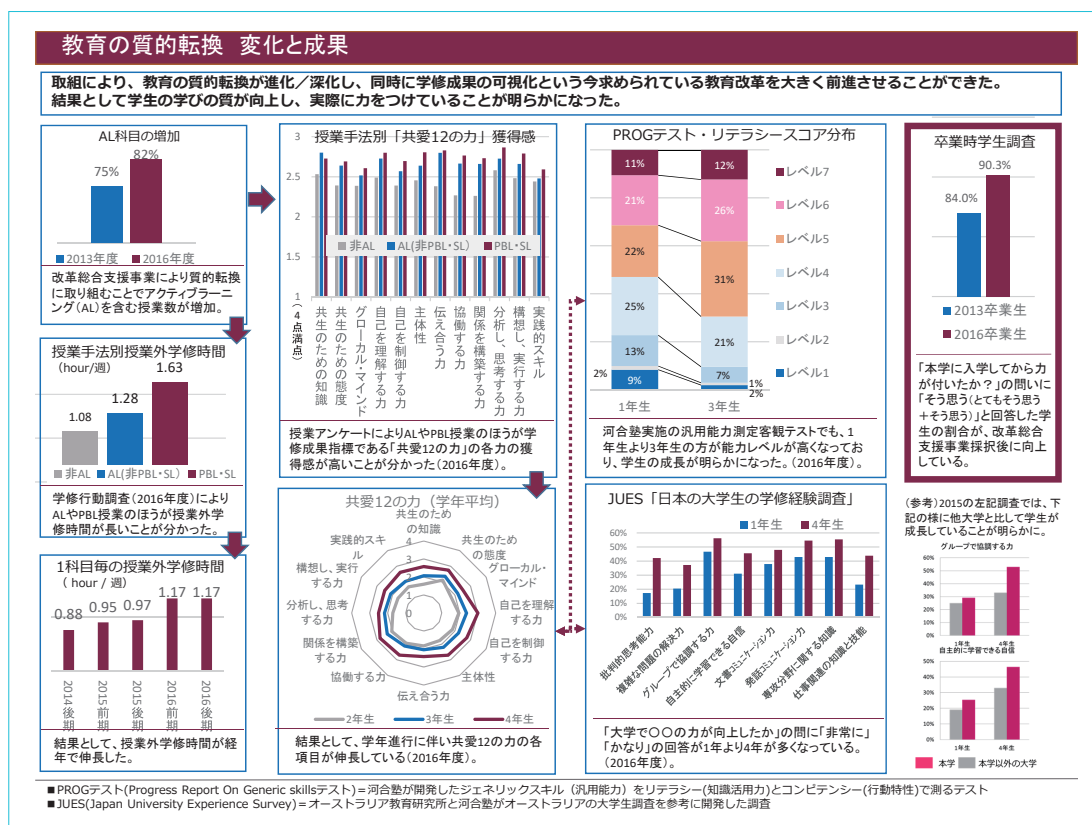


図2 教育の質的転換変化と成果